

都市民俗学から見たヤートセ秋田祭の〈祝祭性〉

—融合文化の事例研究—

On the “Festivity” of YATOSE Akita Festival in terms of Urban Folklore: A Case Study on Harmony & Combination of Cultures

平 辰 彦

TAIRA Tatsuhiko

Abstract : This article aims at a case study on harmony and combination of cultures in terms of urban folklore. I would like to take up the topic of the “festivity” on a creative dance performance, called “YATOSE Akita Festival”, through which the participants seek to express their identities. It has been observed that they are trying to make their choreographies hybrid by incorporating various cultural and folkloric elements, and thereby express their sense of being themselves.

Here, I would like to address the question of what hybridity, an element of great importance in YATOSE Akita Festival, means to regional people, especially in terms of their local identity in the north east city. YATOSE means a first phrase of “Akita Ondo”, which is known as Japanese folk song. There is not much meaning in this passage, but it is familiar to regional people in Akita. This festival was begun under the influence of YOSAKOI SORAN Festival in Hokkaido. YOSAKOI means that woman asks man to come to see her at night in dialect. This word was originally the lyrics of YOSAKOI Festival in Kouchi Prefecture. So YOSAKOI SORAN Festival is based on YOSAKOI Festival. The two folk songs of YOSAKOI and SORAN are combined into one in YOSAKOI SORAN Festival. YATOSE Akita Festival is the Akita version of YOSAKOI SORAN Festival. From my interviews with participants on their performances, I conclude that the participants see YATOSE Akita Festival as a tool to unite people of different cultural and folkloric backgrounds, and that this dynamic relationship with diverse people helps each of them form his or her local identity in the north east city.

Keywords: Festival, urban, folklore, festivity, hybridity, dance, local identity

祝祭、都市、民俗学、祝祭性、ハイブリッド性、舞踊、ローカル・アイデンティティ

はじめに

「民俗学」は、従来、「都市」(マチ)を研究対象とすることが少なかった。「都市」(マチ)の「民俗」を扱ったものとしては、わずかに柳田國男の『都市と農村』などがある程度である。この柳田の『都市と農村』が朝日常識講座(第6巻)として朝日新聞社より刊行されたのは、昭和4年(1929)3月なので、すでに80年の歳月が流れており、これが書かれた時代と現在とではかなり「都市」(マチ)の事情も異なっているが、先ず、この柳田の『都市と農村』を通して柳田の「都市」(マチ)論をみてみたい。柳田の考える「常民」は「田に働く」農民をその根底においており¹⁾、現在、「農村」(ムラ)と対峙される「都市」(マチ)を柳田は本来、「農村」(ムラ)と異なるものではなかったと考える。いわゆる「都鄙連続論」である。この柳田の「都市」(マチ)論は、「都市」(マチ)と「農村」(ムラ)を連続したものと捉えており、「都市」(マチ)は、「農村」(ムラ)の生活の延長線上にあるという視点を強くもっている。そして、「都市」(マチ)の住む住民も農民と本質的に変わらない者であるだけでなく、その「都市」(マチ)自体も「独自の生命の核心が無く」²⁾、「都市」(マチ)は、「多くは半成り」であり、「其模擬模倣すら尚未だ円熟して居ない」と考える³⁾。

さらに、柳田は「都市」(マチ)の「心意」を「衣食住の材料を自分の手で作らぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄かに不安にも又鋭敏にもした」と説明する⁴⁾。このように柳田の「都市」(マチ)論は、すべて「農村」(ムラ)との関係で捉えられているのである。

しかし、「都市」(マチ)にも「農村」(ムラ)とは異なるそれを母胎とした社会構成が成り立っている以上、その「都市」(マチ)の住民の「生活文化」の営みもそこに累積されており、それが〈民俗化〉し、「都市」(マチ)の「民俗」というものになったことは確かである。それは、宮田登が指摘するように「孤立の淋しさと不安」を基調とした「都会風」の文化の表出したものであった⁵⁾。

この「都市」(マチ)における「都会風」の「民俗」を「都市民俗」と呼ぶ。その「都市民俗」の担い手は、「都市」(マチ)の住民である。この住民は、「農村」(ムラ)の農民と異なり、土地や家に帰属する人びとではなく、「少なくとも一つの共通要素を共有している集団の人びと」であり、「重要なことは、どんな理由で形成された集団でも自分自身のものとよべるいくつかの伝承をもっていること」である。そして、それは「その集団が集団としての一体感をもつのに役立つ伝承の共通核の部分を知っていること」である⁶⁾。

この「都市」(マチ)の住人が創造する祭りは、「農村」(ムラ)の祭りとは異なる性格が認められ、「都市」(マチ)の「民俗」の研究対象として取り上げられることが多い。例えば、東京都杉並区高円寺の「阿波おどり」は、はじめ地域振興のために創られた商店

街の祭りであったが、それが流行して、高円寺の祭りとして浸透していき、その祭りが数年にわたって定着すると、これが、高円寺の「風俗」となる。さらに、その「風俗」としての祭りが定着し、安定したものになると、「都市」（まち）の「民俗」といえるものになるのである⁷⁾。

多田道太郎は、『風俗学—路上の思考—』の中で「風俗学」を「民俗学」と比較しながら、その特色を次のように述べている。多田によれば、「民俗学」は、「農村」（ムラ）の変わりにくい「恒常」の「民俗文化」を研究する学問であり、それに対して「風俗学」は、「変化」という観点から「都市」（マチ）の「生活文化」を研究する学問であり、両者は、「時には対立し、時には相補なうもの」なのであるという⁸⁾。このように「風俗学」を捉えると、「都市民俗学」は、「都市」（マチ）の「生活文化」を「民俗文化」と捉え、それをフィールドとして「都市」（マチ）にみられる「民俗」の「変化」のプロセスを調査・研究する学問であるため「風俗学」にきわめて近い存在であるといえる。

「民俗学」が従来調査対象としてきたのは「都市」（マチ）の「民俗」ではなく、「農村」（ムラ）の「民俗」であったが、「民俗学」が「民間伝承」を素材として「民俗文化」の歴史的由来を明らかにすることにより、民族の「基層文化」の性格と本質とを究明し、また、「民間伝承」を通して生活変遷の跡を尋ね、人々の「生活文化」を明らかにする学問であるならば、古い「民俗文化」を研究すると共に現代に発生した新しい「生活文化」をも対象とする必要があるように思われる。

さらに、「民俗学」が現在の生活の中にある「民俗」を通して「基層文化」を探究する現在学であるならば、当然、「都市」（マチ）の「民俗」をも対象とすべきである。

本稿は、こうした観点から「都市」（マチ）の「民俗」として「よさこい系」の祭りである秋田県の「ヤートセ秋田祭」を融合文化の事例研究として取り上げる⁹⁾。

1. 「都市と民俗学」

本稿では、「都市」（マチ）を「民俗学」の中に位置づけ、その「都市空間」をフィールドにし、「都市」（マチ）の「生活文化」をその対象とし、そこに残存あるいは発生した「民俗」を通して「民俗学」的な研究をする学問を「都市民俗学」(Urban Folklore)と規定する。

この「都市民俗学」の視座から「都市」の「民俗」を研究対象にし、調査してみると、「村落」（ムラ）の「民俗」とは異なる性格と特色が見出せる。「村落」（ムラ）は、農村を中心に「日常性」を示す「ケ」の世界と「非日常性」を示す「ハレ」の世界を軸とする恒常的な世界である。一方、「都市」（マチ）は、都会を中心に「非日常性」を示す「ハレ」の世界と「反日常性」を示す「ケガレ」の世界を軸とする流動的な世界である。

柳田國男は、この「村落」（ムラ）の「民俗」について「ケ」と「ハレ」を二項対立さ

せながら論を展開していったが、桜井徳太郎は「ケ」と「ハレ」は対立するものではなく、「ハレ」のなかに「ケ」が、「ケ」のなかに「ハレ」が、それぞれ内在するという形をとり、「相互転換性を保有している」ところにその特色があると述べている¹⁰⁾。桜井によれば、「ケ」は「気」であり、それは、「農業生産を可能ならしめるエネルギー源としての気から出た語」であり、要するに「稲を成長させたり実らせたりする根源的な霊力」が「ケ」であるという¹¹⁾。また、桜井はこの「ケ」の活力が衰退すると、「ケガレ」という状態になるという。つまり、「ケガレ」とは「ケ」が「枯（渴）れてきて日常的活動を十分になしえない状態」をしめす語なのである¹²⁾。

さらに、桜井は「ケ」から「ケガレ」、「ケガレ」から「ハレ」、「ハレ」から「ケ」の循環が止まることなく続けられ、「ケ」「ケガレ」「ハレ」は、「循環構造」になっていると指摘する¹³⁾。

この「ケ」「ケガレ」「ハレ」の語は、日本の民俗学の基本的問題であり、すでに桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子らによって共同討議されているが、この問題は「都市」（マチ）の「民俗」としての祭りを考える時、重要な視点を与えてくれるものである¹⁴⁾。

2. 「村落」（ムラ）と「都市」（マチ）の祭り

祭りという文字は、『広漢和辞典』（大修館）によれば、「いけにえを供えて神意をつまびらかに知る」という意味で「血のしたたる肉」を「台」に載せ、「手」で「カミ」に奉獻することを象形化した文字である。この祭りには、大別して「祭礼」（ritual）と「祝祭」（festival）がある。

藪田稔は、『祭りの現象学』の中で祭りを「祭儀」（ritual）と「祝祭」（festivity）に分け、この「二つの相反する要素が複合して初めて祭りの超越的な表象力が発揮される」と述べているが¹⁵⁾、本稿では、祭りを「祭礼」と「祝祭」の二つのタイプの総称として用いる。

「祭礼」は、「マツリ」を「タテマツル」として、もっぱら「神霊」に奉仕する姿勢から生じた「ヒト」の行動を含み、一般には、神社の「祭儀」をさす。この「祭礼」は、その根底に「カミ」に対する〈信仰心〉がある。つまり、その「カミ」を「タテマツル」ためにおこなわれる〈宗教性〉に力点がおかれた神事儀礼が「祭礼」なのである。

「祝祭」（festival）は、松平誠が『都市祝祭の社会学』で定義しているように「日常の反転、それからの脱却と変身によって、日常的な現実を客観化・対象化し、それによって感性の世界を復活させ、社会的な共感をうみだす共同行為」をさす¹⁶⁾。この「祝祭」は、〈宗教性〉よりも〈娯楽性〉に力点がおかれ、地域振興や観光イベントとして作り出された祭りも対象となる。つまり、この「祝祭」は「カミなき祭り」ともいえる性

格を有する祭りなのである。

「村落」(ムラ)の祭りは、「村落」(ムラ)の神社を中心とする「祭礼」であり、それは、年中行事として毎年、繰り返されている。それは、近世以前からある〈宗教性〉に基づいた〈儀礼空間〉でおこなわれる祭りなのである。

一方、「都市」(マチ)の祭りは、都会の広場や公園、通り(street)などで実施される〈祝祭空間〉でおこなわれる。この「祝祭」としての祭りは、近代に入って創造された「時代祭」(京都)のような「博覧会的イベント」や「よさこい祭り」(高知市)のような戦後、「地域振興のために創造されたイベント」を含む。この祭りは、多くが「参加する祭り」(阿波踊り)であり、「見せる祭り」(YOSAKOIソーラン祭り)である。

3. 「よさこい祭り」の形成と展開

高知市の「よさこい祭り」は、昭和29年(1954)に戦後の商店街の復興のために始められた「イベント」であったが、平成4年(1992)に札幌市で開催された「YOSAKOIソーラン祭り」をきっかけにこの祭りは、急速に各地に伝播した。こうして、全国に伝播した各地の祭りを、ここでは「よさこい系」の祭りと呼ぶ。この「よさこい系」の祭りは、いずれも「見せる祭り」として各地の「都市」(マチ)の〈祝祭空間〉で演じられている。そして、この祭りでは、共通して「群舞」と呼ばれる「ダンス」(dance)が中心となっている。先ず、「よさこい系」の祭りの原点となる高知市の「よさこい祭り」を取り上げてみたい。

「よさこい祭り」の「よさこい」とは、「夜さ来い」という「今晚おいでなさい」の意味で「夜這い」を誘うことばであるといわれている。この祭りは、1954年に「阿波踊り」のように「みんなが楽しめて、しかも永続性のある祭り」をめざした「市民の祭り」として創造された。

第1回目の「よさこい祭り」は、8月10日と11日の2日間開催された。そこでは、鳥をおいはらう時に用いられていた「鳴子」(なるこ)を手にもち踊る「鳴子踊り」と呼ばれる創作舞踊が披露された。

この「鳴子」は、しゃもじ型の形をしており、そこについているバチがしゃもじに触れると、カチカチという音がするものである。これは、カスタネットのような楽器として使用されている。両面にバチがあるのがスタンダードであるが、「片打ち鳴子」と呼ばれるバチが片面しかないものもあり、現在では、色も形も多種多様なものがある。

踊りは伝統的な日本舞踊の型を用いたもので音楽は「土佐のわらべ唄」を参考にし、「土佐ことば」をふんだんに盛り込んだ歌詞が創作された。

この第1回目の初日(8月10日)の夜に競輪場で「鳴子踊り」などの「舞踊大群舞」がおこなわれた。集団で同一の舞踊をおこなう舞踊形態のひとつである「群舞」がこの

第1回目の「よさこい祭り」で披露されて以来、「群舞」という用語が今日、地域のムーブメントとして様々な広がりを見せている。この第1回目には、21団体、750人の参加者があった。

第2回目（1955）以降も参加人数は、予想以上に増え、踊る参加者が「見せるわざ」を磨いたために次第に魅力ある「見せる祭り」へと脱皮していったのである。この第2回目には、30団体、1600人の参加者があった。

第5回目（1958）は、高知市制施行70周年の年で記念として「南国博」が開催され、参加人数も2000人を越えた。翌年（1959）の第6回目には、前夜祭でペギー葉山がヒット曲「南国土佐」を歌う。祭りの初日は8月10日で最終日の11日には、初のテレビ中継がおこなわれ、「よさこい祭り」は空前の盛況のうちに幕となった。そして、第10回目（1963）には、「よさこい祭り」は、南国土佐を代表する「夏の風物詩」といわれるまでになった。

1970年代になると、この「よさこい祭り」は、「正調」以外の踊りも認められるようになり、次第に規模も大きくなっていったのである。

第17回目（1970）の「よさこい祭り」の年は、「大阪万博」が開催された年である。その「大阪万博」の「お祭り広場」で日本を代表する踊りが「日本の祭り」（10選）として披露されたが、そのひとつに「鳴子踊り」が選ばれた。第19回目（1972）の「よさこい祭り」がおこなわれた年には、フランスの「ニース・カーニバル」に出演し、「サンバ調」の「鳴子踊り」が披露された。この海外公演のために創作された「サンバ調」が、日本でも好評を博し、以後、「正調」の他に「サンバ調」「ロック調」などさまざまな踊りが登場し、「鳴子踊り」が〈多様化〉していくのである。

1980年代に入ると、「よさこい祭り」は音楽が自由にアレンジできるようになり、オリジナルな踊りが自由に踊れるようになり、地元の地縁の集団とは異質なグループが急増する。ふだん関係のない人々が「よさこい祭り」で一緒に踊るためだけにチームが結成され、若者たちがここに結集するようになる。

第27回目（1980）の「よさこい祭り」では、65チーム・7000人の踊り子が勢揃いしてパレードをおこなった。この時、すべてのチームがバンドの生伴奏つきで音響設備を搭載したさまざまな装飾をほどこした「地方車（じかたしゃ）」と呼ばれるトラックに先導され、登場した。この踊りの伴奏をし、踊り子たちを先導する「地方車」は、伝統的な祭りの「山車」（ダシ）に相当するものであり、高知県の祭りでは、明治期から大正期、「花台」と呼ばれる華麗な飾り車が出て人気を博したが、この「花台」が「地方車」の原型と考えられる。

第30回目（1983）には、国内ばかりでなく、海外にも知られるようになり、「市民の祭り」から「県民の祭り」となり、「日本を代表する祭り」となった。参加人数も1万人を超え、「よさこい祭り」は大規模な祭りとなったのである。

第31回目（1984）以降、独創的なスタイルが増え、この頃より踊りの振りも、リズムも、衣装もそれぞれ工夫がこらされ、同じものはひとつもないようになる。この第31回目には、プロ集団をめざす高知ミュージカルスクールの200人が「よさこいダンス」を「レゲエ調」や「ジャズダンス調」で披露し、注目を浴びた。

第34回目（1987）には、この祭りに参加するチームの人数が急増したために、一チームの人数を150人以下にするという規制が設けられた。

第35回目（1988）には、ドイツ・ハンブルグで開かれた「ジャパン・ウィーク」で「鳴子踊り」が披露された。

1990年代になると、「よさこい祭り」は、グローバルな広がりを見せ、イギリスやアメリカなどの海外公演が多くなる一方、国内各地に「よさこい系」と呼ばれる大規模な都市（マチ）の「祭り」が創造されようになる。

第37回目（1990）には、スコットランドで開かれた「ジャパン・ウィーク」で「鳴子踊り」が披露され、翌年（1991）の第38回目には、はじめてアメリカで「鳴子踊り」が披露された。

第39回目（1992）の「よさこい祭り」には、北海道の札幌市で6月、第1回目の「YOSAKOIソーラン祭り」が開催された。高知市の「よさこい祭り」は、この年、踊り子が1万6000人を越し、音楽も「正調」のよさこい節からそれをアレンジしたもの、さらに「サンバ調」「ロック調」「ラテン調」など実にさまざまな音楽で踊られるようになり、衣装も百花繚乱となった。

第40回目（1993）の「よさこい祭り」では、40周年を記念して「よさこいシンポジウム」が開催された。この基調講演で文化人類学専攻の東京大学教授（伊藤亜人）が、「よさこい祭り」は「形式や伝統にとらわれることなく出発し、民間主導で柔軟に発展してきた注目すべき祭り」で「参加の形態も多様かつ民主的」であり、「世界的にみてもユニークだ」と高く評価した。

この祭りは、伊藤亜人が指摘するように参加の形態が「多様かつ民主的」で誰でも参加できる＜オープン性＞が大きな特色になっている。

また、この祭りでは、＜ローカル＞な日本の民謡とロックやジャズなどの＜グローバル＞な西洋音楽が融合されており、＜グローバル＞ともいえる和洋混合の＜ハイブリッド性＞が認められる。こうして高知県の「よさこい祭り」は、＜ローカル性＞と＜グローバル性＞をあわせもった日本を代表する＜グローバル＞な祭りへと成長していったのである。

4. 「YOSAKOIソーラン祭り」の＜ハイブリッド性＞

「よさこい祭り」は、平成4年（1992）6月に高知県から北海道へ伝播された後、1

990年代に全国各地に「よさこい系」の祭りが伝播されていくのである。その契機となったのが、北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」である。この祭りは、「鳴子」を手にして北海道の民謡「ソーラン節」をアレンジした曲でそれぞれの参加チームが見物人を前に「群舞」で踊るダンス・パフォーマンスである。当時、北海道大学の学生であった長谷川岳らによる学生実行委員会の企画でこの祭りは開催された。第1回目は10チーム（約1000人）でスタートしたが、平成11年（1999）の第8回目には、札幌をはじめ北海道の内外あわせて333チーム（約3万4000人）が参加する都市（マチ）の「祝祭」となり、その経済効果は130億円と試算され、「優良観光イベント」（hallmark tourist event）となった。

この「YOSAKOIソーラン祭り」は、高知県の文化と北海道の文化を融合して新しい民俗の融合文化を若者の手で作りあげようという目的で開催された。ここには、「よさこい祭り」にみられるさまざまな要素を混ぜ合わせて新しい文化を作り出そうとする〈ハイブリッド性〉の特色が認められる。特にこの祭りの最大の特色は、高知県の民謡「よさこい節」と北海道の民謡「ソーラン節」を組み合わせて創作された曲で、各チームの踊り子たちが人目をひく派手な衣装を身にまとい、それぞれの手に「鳴子」をもって「群舞」で踊ることである。例えば、「ヨッチョレ」という曲は、比較的振りが簡単のために「総踊り」として観客も巻き込んでよく踊られる。「ヨッチョレ」とは、高知県の「よさこい鳴子踊り」のかけ声で「どいてくれ」の意味である。もともとは、「土佐のわらべ唄」の一節から取られたものである。この曲は、高知県の「よさこい鳴子踊り」の曲と北海道の「ソーラン節」の曲を融合させたもので歌詞も両方のものが入っている。

この「YOSAKOIソーラン祭り」では、「よさこい祭り」同様に「サンバ調」「レゲエ調」「ジャズ調」等にアレンジされた踊りがさまざまな衣装で「鳴子」などをもって踊られる。こうした都市（マチ）の「祝祭」では、柳田國男が述べているように見物人（観客）の存在が不可欠である。

また、その見物人に踊りを見せる踊り子たちの多くは、一般募集をおこない、それぞれチームを作り、地域のメンバーに限定されない超域的な活動をしている。そこには、上野千鶴子がいうような『選ばれた』共同体を創り上げようとする志向が認められる。この踊り子は男性に比べて女性が圧倒的に多く、女性主体の祭りであるともいえる。踊り子の踊る時間は、[前口上]と[チーム紹介]も含めて4分30秒と決められている。

この「YOSAKOIソーラン祭り」の踊りには、北海道という風土的な土地柄から「漁業」をモチーフにしたものが多く、「大漁旗」や「チーム名を入れた旗」を振ることも多い。各チームの衣装や「鳴子」などの道具は外注され、音響設備や「地方車」のトラックなどはレンタル会社を利用することが多い。

さらに、観客は、毎年、より刺激のあるものを求め、踊り子もそれに応えようとしてミュージカル風の演劇的な演出も見られる。例えば、踊りに殺陣を入れたり、ミュージ

カル『ウエスト・サイド物語』のように〈ストーリー性〉をもったものもある。「流月～Roots～」(ルーツ)というチームは、9歳(小学3年生)から50代(社会人)までの幅広い年齢層の88名で構成され、平均年齢は27歳である。その構成員の4分の3が女性であり、親子の参加もある。このチームの踊りは、矢島妙子が報告しているように「ソーラン節」の原点に戻り、漁師の一生をイメージして踊られる(17)。踊り子は、それを〈演劇性〉の高い踊りによって身体表現するのである。

舞台の踊り子は、大漁を夢みる漁師となり、船を出し、沖へ出るが、海は荒れる。踊りは、漁師の情熱と自然の〈葛藤〉をテーマに踊られる。音楽は、稲妻・荒海をイメージした力強いものである。衣装は、海の光る「波」や「月光」をイメージして金色が用いられている。そして、帯は「闇」を表現し、黒色である。「鳴子」も衣装に合わせ、黒地にバチが金色になっている。さらに、「地方車」も黒を基調としている。このチームは、音楽から衣装・鳴子・地方車に至るまでテーマに即してイメージを統一しているのである。

北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」には、このように「見せる踊り」を目指し、技術の高い身体表現と演劇的な演出を試みるチームがある。特に有名なチームは、「平岸天神」(ひらぎしてんじん)というチームである(18)。「平岸」とは、札幌の地域名であり、このチームは、その地域の中央商店街振興組合が母胎で郷土芸能として「YOSAKOIソーラン祭り」を保存しようと考え、「平岸天神ソーラン保存会」を作っている。このチームは、単に祭りに参加するだけではなく、地域の郷土芸能として「YOSAKOIソーラン祭り」を位置づけている点が注目される。この保存会に参加できる資格は高校生以上で高度な踊りの技術が要求される。それは、「4つのS」(スピード・シャープ・ストロング・スマイル)である。このチームは人気があり、「YOSAKOIソーラン祭り」以外にも年間、200回もの公演をこなしており、中には、踊りにうち込むために仕事を辞めた人もいるという。2009年の「YOSAKOIソーラン祭り」でこのチームは、北海道に伝承されている「神楽」を取り入れた踊りを披露し、見物人の喝采を浴びた。

北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」では、最初から技術の高い踊りを見せる高知の「セントラルグループ」のようなチームを目標にしている人々も多いが、一方で踊りに〈芸術性〉よりも〈楽しさ〉を求める人々もいる。このように「よさこい系」の踊り子には、〈芸術性〉を求める者と〈楽しさ〉を求める者の2種類のタイプの踊り子がいる。

「よさこい祭り」は、高知から北海道に伝播し、今日では、高知県と北海道のチームの交流も盛んである。そして、各地の「よさこい系」の祭りは、「YOSAKOIソーラン祭り」にみられるように地域の民謡や踊りを取り入れて融合をはかる融合文化の特色が認められるのである。

5. 「ヤートセ秋田祭」における〈祝祭性〉

「よさこい系」の「祭り」は、1992年6月、北海道に取り入れられた「YOSAKOIソーラン祭り」を第1段階とすると、その北海道を参考に始められたものは、第2段階と考えられる。1998年6月、秋田市で始められた「ヤートセ秋田祭」は、その第2段階にあたる「よさこい系」の祭りである。

現在、秋田市の大町・通町で開催されている「ヤートセ秋田祭」は、平成10年(1998)6月21日(日)にはじめて開催された。場所は、中土橋会場とアゴラ広場の会場で12時30分から19時30分までおこなわれた。オープニングは、中土橋会場でおこなわれ、明徳子ども太鼓の演奏で始まり、開会宣言、参加チームの紹介と続く。参加団体は、1. 笑舞会(協和町) 2. 明徳KIDS(明徳小学校) 3. ドンパンまつり実行委員会(中仙町) 4. みちのくYOSAKOIまつり(仙台市) 5. Pleasure(秋田市) 6. レインボーめいとく(秋田市) 7. 放(ファンソン)(秋田市) 8. 大極拳(秋田市) 9. ダンスinきさかた(象潟町) 10. 秋田和洋高校(秋田市)の県内9チームと県外1チームの計10チーム、約300人が参加した。2つの会場あわせて総観客数は、約2200人集った。13時20分から15時20分までこれらのチームの踊りの演技が披露される。秋田和洋高校の演技が終わると、アゴラ広場の会場へ移動となり、15時50分から16時30分までイベントとしてJR・RMC楽団演奏があり、大館市の歌手・佐藤真理子ら7人の審査員の紹介のあと、審査基準の説明がなされた。

審査対象となる踊りの演技は、16時30分より18時30分までおこなわれた。その後、参加チームや観客が入っての自由参加による「フリーダンス」が30分おこなわれた。この「フリーダンス」は、熱気と興奮に包まれた「ヤートセ秋田祭」を大いに盛り上げた。

19時から審査発表となり、第1回の「ベストパフォーマンス賞」は中仙町の「ドンパンまつり実行委員会」が受賞した。この中仙町の「ドンパンまつり実行委員会」は、この「ヤートセ秋田祭」で「ロック・ドンパン」を踊り、「ベストパフォーマンス賞」を受賞したのがある。

この「ロック・ドンパン」は、ロック・シンガーの佐藤真理子が民謡「ドンパン節」をアレンジしてうたった歌にジャズ・ダンス風の踊りをつけたものである。これは、現在も「ヤートセ秋田祭」でよく使用される曲のひとつである。

第1回目の「ヤートセ秋田祭」は表彰式のあと、閉会式となり、19時30分に閉会となった。このように「ヤートセ秋田祭」は、秋田の民謡「ドンパン節」や「秋田音頭」を「ロック調」にアレンジした曲などにあわせて思い思いのコスチュームで踊る「ダンス・コンテスト」として始められたのである。この祭りの名称は、「秋田音頭」の最初の

かけ声からとられたものである。

第1回目の「ヤートセ秋田祭」は、秋田大学鉱山学部の竹内直樹（26歳）が実行委員長をつとめ、県内の短大や大学の学生が実行委員会の中心メンバーとなり、開催された。この「ヤートセ秋田祭」の誕生のきっかけは、明徳地区市民憲章推進協議会の岡部勇作らが前年の5月、札幌市の「YOSAKOIソーラン祭り」をモデルに同地区の活性化を考えて始められた。札幌市の「YOSAKOIソーラン祭り」が北海道の大学生が中心になっておこなわれたことから同地区協議会では、秋田大学の大学生に働きかけ、「ヤートセ秋田祭」が実現したのである。この世代を超えて生まれた「ヤートセ秋田祭」は、当初、10名以上のグループ参加として始められた。

県外から参加した「みちのくYOSAKOIまつり」（仙台市）は、約40名のチームで参加した。このチームは、宮城県出身の高知大学の大学生であった三宅浩司（23歳）が中心となり、結成されたチームである。三宅は、大学祭で「鳴子踊り」を見て自分のふるさとの宮城県にもこの踊りを取り入れたいと願い、1997年8月、「仙台七夕まつり」ではじめて宮城県ゆかりの民謡「大漁唄い込み」をアレンジした曲で「鳴子踊り」を披露し、仙台の人々の喝采を浴びた。この三宅は自ら実行委員長となり、実行委員会をつくり、1998年の秋（10月31日・11月1日）に仙台市内で「みちのくYOSAKOIまつり」の開催を計画していたのである。第1回目の「ヤートセ秋田祭り」にこの三宅のチームが参加したのは、この「みちのくYOSAKOIまつり」への秋田県チームの参加の呼びかけとデモンストレーションを兼ねたものだった。三宅は、「東北はひとつ」をスローガンに東北6県共通の祭りをめざし、イメージとしての東北をいだけさせる「みちのく」ということばを冠につけ、「みちのくYOSAKOIまつり」と命名したのである。この祭りは、対象地域を東北6県に拡大した点に特色があり、そこには、民謡によって培われた東北人としての〈ローカル・アイデンティティ〉が認められる。

1998年は、このように秋田市と仙台市で「よさこい系」の祭りが誕生し、東北の「よさこい系」の祭りが地域を越えて交流した記念すべき年であった。この翌年（1999）の第2回目には、13チームが参加した。踊り子の数は、約300人であった。平成20年（2008）の第11回目の「ヤートセ秋田祭」では、県内外から58チームが参加した。第1回目から連続出場している「レインボーめいとく」チームのモットーは「仲間が和気合々と練習に励み、楽しく演舞すること」である。このチームの平均年齢は67歳と他のチームよりやや高いが、秋田を代表する民謡を組み合わせた曲で楽しく踊る。また、連続10回出場している「GOJOME夢舞明人（むーぶめんと）」は平均年齢が43歳で第3回目（2000）の「ヤートセ大賞」を受賞している。さらに、「ヤートセ秋田祭」の実行委員会が所属している「ヤートセ秋田酔楽天」のチームは第9回目（2006）の「大賞」を受賞している。こうしたチームは、「一般チーム」として参加している。

また、「Jrチーム」部門もあり、第1回目から連続して参加している「明徳KIDS」

は第2回目で「J r ベストパフォーマンス賞」を受賞し、第4回目（2001）と第5回目（2002）では、「大賞」を受賞し、第6回目では、新設された「J r 大賞」部門で「大賞」を受賞している。このチームの平均年齢は10歳である。

「ヤートセ秋田祭」は、このように幅広い年齢層の参加によって老若男女が楽しめる自己表現の場を提供している。この祭りの大きな特色は、参加チームのほかに当日、個人が飛び入り参加できる「フリーダンス」の時間帯が設けられていることである。つまり、この祭りでは、チームとしての集団参加だけでなく、個人参加も認めているため、すべての人に踊る機会が与えられているのである。

また、この祭りでは、「よさこい祭り」や「YOSAKOIソーラン祭り」のように「鳴子」の使用を絶対条件とせず、「鳴子」を使用しなくてもよいことになっている点がユニークである。その意味で「ヤートセ秋田祭」は、「よさこい系」の祭りの中では、かなり制約の少ない「オープン性」を最大限に発揮した祭りであるといえる。

さらに、「ヤートセ秋田祭」では、多くのチームが秋田の民謡をアレンジした曲で踊るため、秋田の〈ローカル性〉が強く出た祭りになっており、「ローカル・アイデンティティ」というものが顕著に認められる。

「よさこい系」の祭りは、この「ヤートセ秋田祭」のようにみんなで踊ることによって「都市」の希薄になった人間関係に新たなつながりが生まれ、地域を越えたさまざまな老若男女の出会いの場を創造している。その意味で「みちのくYOSAKOIまつり」は、各地域の〈オリジナリティ〉を出しながら、多様な東北人としての〈ローカル・アイデンティティ〉が表出されている点が注目される。2002年の第5回目のこの祭りには、145チームが参加し、約6000人の踊り子が参加し、2007年には、合計250チームが参加し、8500人の踊り子が参加し、観客延べ人数は70万人と発表されている。

「ヤートセ秋田祭」も年々、県外の参加者が増加し、青森県・山形県・岩手県・宮城県・福島県などを中心に東京都のチームも第11回目には参加している。県外のチームでは、平均年齢23歳の岩手県奥州市の「江刺華舞斗（えさしかぶと）」が第8回目（2005）と第10回目（2007）で「大賞」を受賞している。

おわりに

2009年の第12回目の「ヤートセ秋田祭」は、安保麻衣を実行委員会の会長として6月27日と28日の2日間、「響」（ひびき）をテーマに大町会場と通町会場でおこなわれた。県外からは18チームが参加し、県内は28チームが参加し、J r チームは18チームが参加した。今年度の大賞は、福島県福島市から参加した「阿武隈踊り隊」が受賞し、J r 大賞は、明德KIDSであった。この明德KIDSは、第1回目より連

続出場している。このチームは、秋田市立明德小学校の小学生で全校児童で取り組んでいる「明德ONDO」を「ヤートセ秋田祭」用にバージョンアップし、明るく、元気に明德カラーを発揮し、今年も演舞した。なお今回、このチームと共に連続出場しているレインボーめいとくチームもパワフルな演舞を披露していた。

今回初出場の「YOSAKOI チームせきれい」は、岩手県盛岡市から参加した。このチームは、「よさこい系」の祭りに「盛岡さんさ踊り」の振りつけや衣装を取り入れた踊りを披露した。この「さんさ踊り」の名称は、菅江真澄（1754-1829）の『鄙廼一曲（ひなのひとふし）』にも登場するが、「盛岡さんさ踊り」は、1978年に商工会議所が主導で創造された踊りで＜市民総参加＞という理念で始められた。この時の名称は、「盛岡夏まつり・さんさ踊り」だった。翌年の第2回目には、「さんさ踊り」の競演会が披露され、第6回目（1983）から名称が「盛岡さんさ踊り」と改められたのである。回を重ねるごとに参加者も増加し、次第に参加団体も趣向をこらすようになった。盛岡大学の「盛大さんさ」は「盛岡さんさ踊り」の「七夕くずし」と「栄夜差（えやさ）踊り」の両方を基本にしなが、独特のアレンジを加えた振りつけをおこなっている。

藪田稔は、『祭りの現象学』で祭りとは、「群衆の様式化」と述べているが¹⁹、「ヤートセ秋田祭」をはじめとした「よさこい系」の祭りには、この「群衆の様式化」が「群舞」を通して顕著に認められる。こうした「都市」（マチ）の「祝祭」には、「見せる」という要素がとても重要であり、それぞれのチームが踊りや衣装、音楽に趣向をこらし、各チームの＜独自性＞を強く出そうとしている。しかし、そうした＜独自性＞を強調しすぎると、＜ローカル＞なその土地特有の＜地域性＞が希薄になる傾向も認められる。この両者の折り合いをどうつけるかが、今後の大きな課題のひとつである。

以上、「よさこい系」の祭りの参加チームそれぞれの踊り子たちの表情を注意深く観察してみると、老若男女いづれも目をきらきら輝やかせて日常の「ケ」の世界ではみられない笑顔を見せて踊っているのが印象的である。踊り子たちは、まさに「ハレ」の世界で他者に見られながら、自己表現を「群舞」を通して果たしているのである。

「ヤートセ秋田祭」のこうした「群舞」を「都市民俗学」の視座から考察してみると、日常の「ケ」の空間として利用されている「ストリート」（street）が、この「ヤートセ秋田祭」の開催される時だけは、「ハレ」の空間となり、そこで「群舞」が行なわれることによって、「都市」の「ストリート」の「ケガレ」が祓（はら）われたとみることができる。つまり、こうした視座を通して「ヤートセ秋田祭」における＜祝祭性＞が「都市」の＜祝祭空間＞に誕生するのである。

「ヤートセ秋田祭」は、この＜祝祭空間＞で秋田の地域それ自体を元気にさせるばかりでなく、そこに集う人々のところをも元気にさせてくれる「群衆の様式化」された祭りなのである。そして、「ヤートセ秋田祭」をはじめとした「よさこい系」の祭りにおける＜祝祭性＞は、こうした「都市」の＜祝祭空間＞において人々の前に立ちあわれてく

るのである。

全国に伝播した「よさこい系」の祭りは、矢島妙子が「『よさこい系』祭りの全国展開の分布—伝播をめぐる統合的枠組を基礎として—」で指摘しているように祭りの「踊りそのもの」が伝播したのではなく、「祭りの“形式”」が伝播したものであったとみることができ(20)。そして、この「祭りの“形式”」は、「群衆の様式化」された「都市民俗」の〈祝祭空間〉を成立させる上で不可欠なものであり、それは、〈民俗的なドラマトウルギー〉ともいえる「メソッド」(method)によって構築されているのである。この祭りの「メソッド」が各地の〈地域性〉と融合され、伝播することによってさまざまな地域の〈ローカル・アイデンティティ〉が形成され、地域を越えた融合文化が生成されていくのである。

【付 記】

この論文は、2009年11月7日、たざわこ芸術村温泉ゆぼぼ「紫苑」でおこなわれた第27回東北地方民俗学合同研究会で口頭発表したものを論文としてまとめたものである。当日、この研究会に参加した菊地和博(東北芸術工科大学)、大石泰夫(盛岡大学)、小野寺節子(國學院大学)の諸氏からは貴重な助言を得た。また、本稿をまとめるにあたって矢島妙子(名古屋大学大学院修了・文学博士)から貴重な資料の提供を受けた。ここに記して謝意を表したい。

註

- (1) 柳田國男 1969 『定本 柳田國男集』 第16巻 筑摩書房 262頁。
- (2) 柳田國男 1969 『定本 柳田國男集』 第16巻 筑摩書房 388頁。
- (3) 柳田國男 1969 『定本 柳田國男集』 第16巻 筑摩書房 389頁。
- (4) 柳田國男 1969 『定本 柳田國男集』 第16巻 筑摩書房 250頁。
- (5) 宮田登 1990 『民俗学』 放送大学教育振興会 174頁。
- (6) 宮田登 1990 『民俗学』 放送大学教育振興会 177頁。
- (7) 私は、1958年に東京都杉並区高円寺という中央線沿線の「都市」(マチ)に生まれ、育ったが、この高円寺では、私の生まれる前年(1957)から駅前商店街の行事として「阿波おどり」が始まった。この当時、中央線沿線で人気を集めていたのは、阿佐ヶ谷の「七夕まつり」であった。これは、仙台の「七夕まつり」を模範にした行事で1950年代・1960年代の東京名物のひとつであった。高円寺の「阿波おどり」は、この阿佐ヶ谷の「七夕まつり」の対抗イベントとして創造された祭りであった。それが、1980年代になると、「高円寺阿波おどり連

協会」が結成され、徳島の「阿波おどり」の有名な「連」と交流が増え、「阿波おどり」の技能のレベルも飛躍的に高まった。さらに、この高円寺の「阿波おどり」は高円寺という「都市」(マチ)をはみ出し、関東一円に広がっていったのである。この高円寺の「阿波おどり」は、「非伝統的」な「都市祝祭」の代表として今日では考えられている。松平誠『都市祝祭の社会学』(1990 有斐閣)の第3章(242-320頁)参照。

- (8) 多田道太郎 1978 『風俗学一路上の思考一』 筑摩書房 7頁。
- (9) 矢島妙子は、「よさこい系」の「祭り」を「原則として鳴子を持ち、地元の民謡などを取り入れて踊る祭り」と定義している。内田忠賢編『よさこいYOSAKOI学リーディングス』 2003 開成出版 62頁。
- (10) 桜井徳太郎「結衆の原点」 1974 鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険一社会と変化の新しいパラダイム一』 筑摩書房 220頁。
- (11) 桜井徳太郎 1974 前掲書 222頁。
- (12) 桜井徳太郎 1974 前掲書 224頁。
- (13) 桜井徳太郎 1974 前掲書 224-225頁。
- (14) 桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子 1984 『共同討議ハレ・ケ・ケガレ』 青土社 174-235頁参照。
- (15) 藪田稔 1990 『祭りの現象学』 弘文堂 60頁。
- (16) 松平誠 1990 『都市祝祭の社会学』 有斐閣 2頁。
- (17) 矢島妙子 2000 「祝祭の受容と展開一『YOSAKOIソーラン祭り』」 日本生活学会編 『生活学 祝祭の100年』 第24冊 ドメス出版 157-158頁参照。
- (18) 矢島妙子 2000 「祝祭の受容と展開一『YOSAKOIソーラン祭り』」 159-161頁参照。
- (19) 藪田稔 1990 『祭りの現象学』 43頁。
- (20) 矢島妙子 2003 『よさこいYOSAKOI学リーディングス』 開成出版 107頁。

主要参考文献

- 内田忠賢編 2003 『よさこいYOSAKOI学リーディングス』 開成出版
- 大石泰夫 2003 『芸能の<伝承現場>論 若者たちの民俗的学びの共同体』 ひつじ書房
- 倉石忠彦 1990 『都市民俗論序説』 雄山閣

- 倉石忠彦 1997 『民俗都市の人びと』 吉川弘文館
- 桜井徳太郎・谷川健一・坪井洋文・宮田登・波平恵美子 1984 『共同討議 ハレ・ケ・ケガレ』 青土社
- 藺田稔 1990 『祭りの現象学』 弘文堂
- 多田道太郎 1978 『風俗学一路上の思考一』 筑摩書房
- 坪井善明・長谷川岳 2002 『YOSAKOIソーラン祭り 街づくりの経営学』 岩波書店
- 鶴見和子・市井三郎編 1974 『思想の冒険一社会と変化の新しいパラダイム一』 筑摩書房
- 日本生活学会編 2000 『祝祭の100年』 ドメス出版
- 松平誠 1990 『都市祝祭の社会学』 有斐閣
- 松平誠 2008 『祭りのゆくえ一都市祝祭論一』 中央公論新社
- 宮田登 1990 『民俗学』 放送大学教育振興会
- 宮田登 2006 『都市の民俗学』 吉川弘文館
- 柳田國男 1969 『定本 柳田國男集』 第16巻 筑摩書房